



「ものづくりはひとづくり」～教育に望むこと～

株式会社若野鋳造所

代表取締役社長 若野 歌子

このお話をいただいた時、さて私に何が書けるのかと悩みましたが、ちょうど今年還暦を迎えるので節目ということで、今、思うことを書いてみようと思います。

(株)若野鋳造所は、高岡で鋳物を製造している社員50名位の会社です。

もうすぐ創業150年を迎える老舗の会社です。昔は銅の美術品を作っていましたが、戦後になって鋳鉄の機械鋳物にシフトしました。1トン、2トンという大物を中心に「手込め」という方法で砂型を製作しています。まさしく人の手で砂を固め、その中にこれも同じ製法で作った「中子」というものを手で組み込みます。自動化するには難しい複雑で大きな製品を中心に製作しています。そのため人の力が大きな役割を果たしています。まさしく技術のたまものです。

最近、若者の就職の傾向がホワイトカラーにどんどん進んでおり、まさに当社のような職業は選ばれないのが現状です。その中でも当社は平均年齢40歳で、業界では若いほうです。高校への就職活動を長年続けていることはもちろんですが、従業員一人一人が自分達の会社という意識を持って自発的に動いてくれることが、若者を惹きつける雰囲気を作っているのだと思います。また、そのようにしむけていくことが大事です。それは会社も学校も同じではないでしょうか。

今の学校教育では、ITの教育が早い段階から取り入れられているので、小学生でもプログラミングができると聞いています。益々IT化していく世の中でそういうこともすごく大事なことです。が一方で技術が必要な、AIにはできないこともたくさんあるのです。当社のような仕事はそのひとつです。

人には向き不向きがあります。当社で言えば、一つ一つ「中子」というパーツを組み込んで鋳型を作っていくという繊細な作業、一方で1500度まで上がった溶けた鉄を扱うという度胸のいる作業と、両極端の仕事があります。どの従業員がどのような工程に向いているかを見定めて、より力の発揮できる工程を任せることがすごく大事です。いくら不得意なことを教えて早くやらせようとしても、好きや得意にはかないません。その一つ一つをまとめて目標に向かってより大きな力に変えていくことこそが、私たち中小零細企業が生きていく術です。

先日、報道でも取り上げられていましたが、2038年春の富山県の中学卒業者は現在より3割減るそうです。それに向けて県立高校の再編が段階を踏んで行われます。どのように進められるかという内容は、これから有識者の方々や関係者の方々の意見を聞き、話し合いで決めていくそうです。個人的には、特徴のある学校を作ってほしい、「ものづくり富山」を活かせる学校づくりをしてほしいです。普通科ばかりではなく、「ものづくり科」みたいな学科を作ってほしいです。

富山機電工業会を中心とした「富山県中学生ものづくり教育振興会」が行っている、県内の製造業企業への「工場見学」は素晴らしい取組だと思います。少しでも製造業に興味をもってくれる生徒を増やすことは富山県の製造業を発展させるために不可欠なことです。生徒一人一人の興味を伸ばしていけるような教育をし、そのフォローができる仕組み、しいてはそのような高校ができることを望みます。

日本国内の労働人口は年々減っていきます。当社には10名の外国人実習生がいます。できれば日本の人を雇いたいのですが、前述したように難しく、外国人実習生は必須になっています。一方で国内ではニートが増えているのも現状です。何とかその食い違いが少しでも減るような教育に少しでもなって、製造業を選んでもくれる若者が増えることを期待したいです。



工場内



「鋳型」の組立作業



電気炉の注湯作業